

1/25,000 徳島県中央構造線活断層帯(讃岐山脈南縁)活断層図

徳島県中央構造線活断層図検討会

- ・委員長 岡田 篤正 京都大学名誉教授、立命館大学歴史都市防災研究センター 教授
 - ・委員 後藤 秀昭 広島大学大学院文学研究科地理学教室 准教授
 - 堤 浩之 京都大学大学院理学研究科地球物理学教室 准教授
 - 中田 高 広島大学名誉教授
 - 村田 明広 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 教授
- (あいうえお順)

平成 24 年 9 月

徳 島 県

記号 Legend

| | | |
|---|--|--|
| 活断層 | | 断層崖、谷の屈曲や尾根の屈曲など各種の活断層の地形が明確で、位置が確かなもの。 |
| 活断層(位置やや不明確) | | 活断層の地形が、侵食や堆積作用、あるいは人工的な要因で変更されたため、位置及び延長が明確には特定できないもの。 |
| 活断層(活撓曲) <small>かつとうきょく</small> | | 変位がやわらかい地層内でひろがり、地表には崖(段差)ではなく「たわみ」として現れたもの。たわみの範囲を示す。 |
| 活断層(伏在部) <small>ふくざいぶ</small> | | 新たな地層(扇状地堆積物、沖積層など)に被覆され、変位を示す地形が直接現れていないもの。 |
| 活断層(伏在活撓曲) <small>ふくざいかつとうきょく</small> (位置不明確) | | 新しい地層に覆われて、断層地形が地表で確認されていないが、物理探査などによりその存在が確認されているもの。ボーリングなどにより断層の直接的な確認が行われていないため、その位置は不明確。 地下の堆積物(沖積層)には「たわみ」が形成。 |
| 推定活断層 | | 活断層の存在が推定されるが、現時点では変位地形やその変位基準の年代が明確には特定できないもの。 |
| 縦ずれ | | 活断層の動きに伴う上下方向の変位の向き。相対的に低下している側に短線を付す。 |
| 変位した谷線 | | 活断層の横ずれ活動により変位した谷線。 |
| 変位した段丘崖 | | 活断層の横ずれ活動により変位した段丘崖。 |
| 活断層露頭 | | 活断層の露頭(破碎帯を含む)。 |
| ボーリング地点 | | 活断層位置を推定した重要なボーリング地点。 |
| トレンチ調査地点 | | 活断層の通過地点にトレンチ(溝)を掘り、断層運動の解読調査を行った地点。 |
| 反射法弾性波測線 | | 反射法弾性波探査を実施した測線。 |

利用上の注意

1. この図の特徴

この活断層図は、平成9～11年度に実施した徳島県活断層調査による「中央構造線活断層系(讃岐山脈南縁)活断層図」をもとに、平成11年度(第2版は平成20年度)に刊行された1:25,000都市圏活断層図「徳島」「川島(第2版)」「脇町(第2版)」「池田」「伊予三島」、後藤秀昭・中田高(2000):「四国の中央構造線活断層系—詳細断層線分布と資料—」および中田高・今泉俊文編(2002):「活断層詳細デジタルマップ」などを参考に、徳島県中央構造線活断層図検討会において各種の空中写真判読による再検討を行い、徳島県が作成しました。

2. 活断層とその区分

この図における「活断層」とは、最近数十万年間に概ね千年から数万年の間隔で繰り返し活動してきた跡が地形に明瞭に現れており、今後も活動を繰り返すと考えられるものをいいます。このうち、風雨による侵食や堆積、また人工改変の影響などで活断層の位置を明確に表示できない区間は破線で、活動の跡がその後の新しい堆積物(土砂)の下に埋もれてしまっている区間は点線で示しています。

また、活断層の可能性のある地形であるが、活断層以外の原因でできたとも説明できるもの、または、今後も活動を繰り返すかどうか明確に判断ができなかったものは「推定活断層」として表記しました。

3. 未知の活断層の可能性

扇状地、沖積低地、または埋立地・干拓地などの平野部は、川が運んできた土砂などによって最近数千年間に形成された土地です。ここでは今回の調査で確認できなかった未知の活断層が埋もれている可能性も残されています。また、侵食・堆積作用及び人工改変などの影響により、空中写真判読による地形的調査手法では認定できなかった活断層が存在する可能性もあります。

4. この図から把握できることの限界

この図から、それぞれの活断層がいつ動くかはわかりません。現在の科学技術では、活断層がいつ動くかについて予知することは困難です。

徳島県活断層調査などでは、一部の活断層でトレンチ調査により過去にいつ動いたか調べています。

徳島県の調査結果では、最新の活動時期は16世紀後半から17世紀初頭で、1596年慶長伏見地震で活動した可能性が高く、再来間隔は1,100～1,700年程度であると考えています。最新の活動時期からの経過年は400～450年であり、県内の中央構造線活断層系全体が活動するような地震は当面さし迫っていないと評価しています。ただし、400～450年の経過年でもマグニチュード*7程度の地震を発生させるエネルギーはすでに蓄積されていると考えられ、短い区間の活断層が単独で活動する可能性はあります。

※マグニチュードは地震の規模を表します

5. 参考資料

- 1) 水野 清秀 他(1993): 中央構造線活断層系(四国地域)ストリップマップ(縮尺1:25,000), 地質調査所
- 2) 岡田 篤正 他(1999): 1:25,000都市圏活断層図「徳島」, 国土地理院技術資料D1-No.368
- 3) 岡田 篤正 他(2009): 1:25,000都市圏活断層図「川島(第2版)」, 国土地理院技術資料D1-No.524
- 4) 中田 高 他(2009): 1:25,000都市圏活断層図「脇町(第2版)」, 国土地理院技術資料D1-No.524
- 5) 後藤 秀昭 他(1999): 1:25,000都市圏活断層図「池田」, 国土地理院技術資料D1-No.368
- 6) 堤 浩之 他(1999): 1:25,000都市圏活断層図「伊予三島」, 国土地理院技術資料D1-No.368
- 7) 後藤 秀昭・中田 高(2000): 四国の中央構造線活断層系—詳細断層線分布と資料—, 広島大学 総合地誌研究資料センター
- 8) 中田 高・今泉 俊文 編(2002): 活断層詳細デジタルマップ, 東京大学出版会

この図は、国土地理院長の承認を得て、同院の技術資料D1-No.368都市圏活断層図「徳島」「池田」「伊予三島」及び技術資料D1-No.524都市圏活断層図「川島(第2版)」「脇町(第2版)」を利用し作成したものである。
(承認番号 国地企調第77号 平成24年6月15日)

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の数値地図25000(地図画像)を複製したものである。
(承認番号 平24情複、第255号 平成24年7月31日)